

弓月尉が、珠王院を訪れたのは、この日の昼頃である。

鹿太が弓月尉の邸にやってきて、ふたりで昔の思い出話をしたことを、瑠璃若と白眉に話してきたものである。瑠璃若も白眉も、すでにウロによつて伝え聞いて知っていたので、同じ話を一度聞くことになったが、弓月尉の眉が晴れ晴れと開いているのを見るのは、気持ちのいいものだった。

弓月尉は、話を終えると、珠王院の大庭に出た。この院の本堂は、春先に焼け落ちたので、今は造営のために、

工匠が毎日やってきて仕事をしている。そのため、大庭の白砂の上には、建材が積まれ、かんな屑くずが舞っている。粗この音や、大きなかけ声が響いており、たいそう賑にぎやかだった。こういうものを見るのが好きで、一回りして、彼らの仕事ぶりを眺めては、ひとつひとつの造築の技法に驚き感心している。

それが済むと、違う庭に行く。珠王院の敷地は広く、大庭の他にもたくさん庭があり、特に釣殿つりどののある池の周りが好みであった。秋の花が咲く頃である。庭の手入れをする下法師たちが、丹精込めて咲かせた桔梗ききょうを見て、うむうむと、満足そうな笑みを浮かべている。

「風雅な庭だなあ。この俺に、笛の才があらば、一曲奏でたいところだが」

武芸の才はあっても、楽才はないので、これは諦めるしかない。

ふと、渡殿の方を見ると、ふたりの稚児が歩いているのが見えた。

それを、ちょうどそこに来た若い僧侶が呼び止めた。

「文殊丸、瑠璃若、こちらに来なさい、髪に香油を塗ってあげますよ」

「それならば、今朝方、つけました」

「そうですか、ならばよいです。そちらに、なにをしに行くのですか？」

「お部屋で双六すごろくでも、と思っております」

「なんと、馬鹿な」

若い僧侶は、己の額に手をやり、嘆く仕種しぐさを見せた。

「いいですか、あなたたちは、僧院の花なのです。それが部屋に籠もってどうするのですか。双六なら、あちらの縁の陽だまりでなさい。すれば、そばを通る法師らの眼の保養となりましょう。ちよほどよい機会ですから、

双六ではなく、碁を教えましょう」

いそいそと碁盤を持ってきて、稚児たちは、秋の陽を抱き込んだ法堂のまわり縁の角で、碁を始めた。

「さあ、先手は瑠璃若ですよ」

黒い碁石を瑠璃若に握らせ、優しく微笑んでいる若い僧は、円恵である。

「稚児もそうだが、円恵殿も眼の保養だ。女性のように柔らかい面をしておられる」

弓月尉はひとりごち、そちらにも笑みを向けて、うむうむ、とうなずいた。

実は弓月尉は、僧侶を見分けるのが得意ではない。どの僧も頭を丸めている上に、同じような僧衣を着ているので、よほどの特徴がないと、誰が誰やらわからないのである。その上、名を聞いても、戒名など、どれも似て聞こえるので、名前を覚えるのにも時間が要る。

それが、この円恵だけはすぐに覚えた。面の造作が整っており、色が白いので、はじめは女性が法師に扮しているのではないかと思つたほどだった。だが、それだけではない。初対面の印象が強烈であった。

初めて円恵と出会つたのは、二ヶ月ほど前である。案内の法師に連れられて、迷路のような僧坊の廊下を歩いていた時のことだ。向かいから、円恵が歩いてきて、こちらが「きれいな面の法師だ」と思っていると、円恵の方は、弓月尉を見て、限りなく眼を見開き、驚きのあまりしばし声も出ないという様子であった。

次の瞬間には、駆け寄ってきて、思わず、というように、弓月尉の袂をつかんだ。

「明海様ではありませんか！ このお姿は、どうされたのです？ 高野を離れた後、還俗なされたのですか？」

還俗とは、出家して僧になつたものが、普通の人に戻ることを云う。どうやら、知り合いの法師と間違えているらしい。弓月尉は、困つたり照れたりした時の癖で、鬢を掻いた。

「円恵殿、この方は、右衛門大尉殿ですよ」

案内の法師がそう云うと、呆然としたように弓月尉の顔を見つめて、弓月尉の袂から手を離した。

「そうでした……、お別れしてから何年も経つのですから、明海様はもっとお歳をとつてはいるはず……」

誰に云うともなく呟いて、我に返つたように、声音を変えた。  
「申し訳ございません、昔の知り合いに似ておられるので、人違いをいたしました。ご無礼をお許しください」

頭を下げ、何事もなかつた様子で、行つてしまつた。

以来、弓月尉は、円恵に出会えば、破顔してなにか語りかけようとするのだが、円恵の方は、初対面の時の出来事など、すっかり忘れたという風に、微笑を纏つた面で会釈をして、そのまま行つてしまうので、結局円恵と一言も言葉を交わしていないことになる。

稚児たちに、碁を教え始めた円恵を見て、弓月尉は、

「これはよい機会」

呟き、庭から濡れ縁に歩み寄つた。

「まいりますよ、文殊さん」

瑠璃若が碁石をかまえる。

「さてもよい敵、さ、ごさんなれ」

文殊丸が微笑み、瑠璃若が最初の手を打つて、囲碁の勝負が始まつた。

「ほう、碁か、文殊丸はともかく、瑠璃若には難しいのではないか？」

弓月尉が縁の端に手をかけ、擲楯を込めて声をかけると、瑠璃若は、すまして微笑んだ。

「難しいかどうかは、やってみねばわかりません」

さもそうず、と笑い声を上げると、文殊丸もにこやかに笑った。

「弓月様がおいでになると、空気が明るく華やぐようですな」

弓月尉の声が大いことを、そういう言葉に包んでいるのに気がついて、弓月尉は、ははは、といよいよ声を上げて笑った。ちりり、と円恵を見ると、円恵も笑ってくれていたなら、なにかと語りかけやすい。

だが、円恵は笑ってはいなかった。弓月尉など、そこにいないとでもいうように、碁盤に目を落としている。

「さあ、次は文殊丸の番ですよ」

弓月尉は、笑いをおさめて、鬢を搔いた。

この間、人違いをされた明海という僧のことを訊きたかったのだが、話せる雰囲気にはならなかった。それどころか、どうやら円恵には、避けられているらしい。

声が大きすぎたか。

ぼりぼりと、今度は顎を搔いた。声が大いことで、いやがられることはたまにある。嫌われたのなら、しかたがない。おどけたように眉を上下し、さっぱりと諦めて、また庭の方に歩き出した。

「弓月さん、どちらへ」

瑠璃若が声をかけてくる。

「碁の邪魔になつてはいかん、今日は、もう帰ろう」

そのまま、珠王院の門へ行き、門衛に預けた弓箭を受け取り、その日は帰ることにした。

ところが、まっすぐ浴には戻れなかった。

天桃山の山下には、瑞調寺に依存した集落がある。参詣に訪れる者たちのために、宿坊が幾つもあり、山に登るのには、牛車は使えないので、車や牛を預かってくれる者もある。牛や馬だけならば行ける山道もあるが、そこらは古木の根がはびこっていて、なかなか行かないので、大荷物でもない限り、たいていの者は、乗り物を山下に預けていく。里坊もいくつもあり、そこには瑞調寺の年老いた僧らが起居していて、これが宿を貸してくれることもある。参詣客のために、物売りも来たりするので、人は多い。陽の高いうちは、この一帯はたいそうな賑わいである。

弓月尉は里坊に知り合いがいるので、その下法師に、いつも馬を預かってもらっていた。

長いつら折りの石段を下り、そちらの里坊に向かって歩いてみると、道の向かいから人がやってきた。二人いる。一人がもう一人を背負って歩いている。どちらも黒い衣を着ているところを見ると、遊行聖らしい。

衣は、ポロポロで、埃や泥で汚れきっている。長旅をしてきたようだ。一人が力尽きたので、もう一人が背負っているのだろう。

顔が見えるほどになって、弓月尉は、この二人が不憫になった。

おぼろげに負ぶさっている方は、九十歳にもなるるかという白髭の老僧である。面は、皺くちやで、どこが眼なのかすら判然としない。顔中がしみだらけで、丸めた頭にまで大きなしみが広がっていた。それがこの僧の生きてきた年月の長さを物語っている。